

浜松地域の不登校支援の情報拠点及び居場所支援に関する研究

浜松学院大学 地域共創学部 地域子ども教育学科
(不登校支援 ワンダーワンダー)

指導教員：准教授 笥有子

参加学生：松本彩優、馬塚倭空、大平樹、
片山颯太、渡邊絢捺、山田結菜（浜松学院大学）
福井健吾、阿部壮太郎、山田明音、蓑島平雪、
廣川渉生（静岡文化芸術大学）

1 要約

本団体は、浜松学院大学と静岡文化芸術大学の2大学の学生が参加して、浜松地域で不登校児童生徒支援の活動を行い、その有用性や意義について検証を行っている。大学内に定期的に子どもと保護者の居場所を設け、寄せ植えや工作での楽器づくりを行った。参加者の居心地を重視した環境設定を検討した上で、アート活動やボードゲームを通じて相談や情報収集ができる場を目指した。そのほか、子どもの居場所視察訪問やボランティアを通してより良い居場所について検証を行い、学園祭の情報提供ブースには、135名以上が来場した。課題としては、中学生の参加促進が挙げられ、今後は地域における不登校理解の深化が求められると考えられた。一般参加者からはプレッシャーなく「受容される」ことが心地よいと評価を頂いた。

2 研究の目的

不登校児童生徒に対しては、教育機会確保法（2016）により、個々の状況に応じた必要な支援を行うことが求められているが、現時点で支援は限られており、該当する子どもや保護者の孤独感、学業の遅れや将来に対する不安は想像される場所である。この課題に対し保育・教育を専門とする浜松学院大学の教員が指導者となり、所属大学の枠を超えた有志学生が浜松地域での不登校支援について研究し、地域貢献事業を実施する。

本研究では大学内に不登校児童生徒及び保護者が訪れることのできる時間を提供し、フリースクールや適応指導教室に向かう前段階の居場所として、ものづくりを楽しんだり情報収集や相談ができるようにする。また、大学の夏季休業に外部の事例を検討するためにフリースクールを訪れ、その活動に関するボランティアやその中での聞き取りを通じて実態を把握する。大学学園祭の機会を活用し、保護者・関係者の交流会を実施しフリースクール等の情報提供を行う。

昨年度の成果として市民団体との連携や教育委員会との情報共有、静岡大学附属中学校での中学生の総合学習の時間との共同的な活動を行うことができた。本年度は、フリースクール等居場所支援の施設や本団体が主催する事業において子ども等との活動でのエピソード記録を行い、ものづくり活動の実践効果についての検証や、不登校の児童生徒に対するよりよい居場所のデザインに関する場の検証を行う。

3 研究の内容

3-1 学内での活動

教育関係者と不登校支援に興味を持つ学生が集まり、不登校児童生徒とその保護者がアート活動やボードゲーム、情報交換を行える定例会を提供した。この定例会は、6月、7月、9月、10月の計4回行われた。場所は浜松学院大学の教室または会議室で、時間は13時から14時半とした。定例会では、アート活動スペースとボードゲームスペース、不登校に関する書籍などを設置した情報収集スペースの3つを設けた。アート活動では、毎回1つの活動テーマを学生が決め、学生が企画準備を行った。また、当日は学生がファシリ

テーターとなって活動のサポートを行った。アート活動が取り入れられている理由として、形を創作し、色を置くことに正解はなく、誰にとっても参加しやすいこと、手を動かすことで話題を切り出しやすく、参加者間の心の距離を縮めることが期待されることが挙げられる。ボードゲームスペースでは、今回の助成金で購入したボードゲームを設置し、学生がそれらを用いた遊びのサポートを行った。情報収集スペースでは、不登校支援やアートに関連した書籍及び食育に関する本も設置した。

アート活動で実施したテーマは、「寄せ植え」「モールドール」「結束バンド工作」「楽器づくり」であった。6月に実施した「寄せ植え」では、一つの鉢に観葉植物や多肉植物を寄せ植えするワークショップを行った。会場は、浜松学院大学、第一会議室であった。今年度初めての定例会ということもあり、10名以上の参加者が訪れた。参加者は、好きな鉢の一つを選び、そこに自由に植物と土、ウッドチップなどを入れて自分だけの寄せ植えを作った。この寄せ植えは、写真を撮って楽しむことも、自宅で育てることもできる作品となる。完成した作品は、参加者に持って帰って頂いた。

7月に実施した「モールドール」では、柔らかな素材の長尺モールを使って人形を作るワークショップを行った。会場は、浜松学院大学、第一会議室であった。用意した素材が不足するほどに、数多くの作品が誕生した。作り方が分かる本を参考に、ワイヤーの入ったモールを曲げてねじり合わせて人形を制作した。目や鼻のパーツに加え、リボンなども使って参加者の好みに合った人形を作り上げた。これらは、家に飾ることも、ボールチェーンを付けてカバンに付けることもできる手のひらサイズの人形となる。完成した作品は、参加者に持って帰って頂いた。また、この回からボードゲームを用意して、ワークショップに飽きた、または興味がない参加者が遊べるスペースを設けた。

9月に実施した「結束バンド工作」では、結束バンドを使って参加者がイメージした形を作るワークショップを行った。会場は、浜松学院大学、第一会議室であった。結束バンドのカラーバリエーションが少なかったことや、具体的な作り方を書いた資料がなかったことが原因で、参加者にとって難しいものとなった。この工作は、結束バンドのつなぎ合わせられる特性や、一度結ぶと二度と解けない特性を活かしたものである。一つの結束バンドに複数の結束バンドの留め具を通して形づくることも可能である。結束バンドは柔らかいため、指で曲げると簡単に跡がつき、はさみで切ることもできるため工作向きの素材と言える。完成した作品は、参加者に持って帰って頂いた。また、この回から会場内のホワイトボードに絵を描く参加者も現れた。

10月に実施した「楽器づくり」では、ストローやペットボトルを使って楽器を作るワークショップを行った。会場は、浜松学院大学、1101講義室であった。音の出る楽器が完成するため、賑やかな会場となった。内容は、作り方が分かる本を参考に、身の回りにあるゴミとなるようなものを楽器にする工作であった。参加者は、ストローを組み合わせただけの笛や、段ボールとビーズを用いた打楽器を制作した。手を動かす工作の楽しさに加え、音が出るという驚きがある作品が完成した。完成した作品は、参加者に持って帰って頂いた。

11月には、浜松学院大学の学園祭にて、活動報告展示と本年度に実施したアート活動が行えるワークショップを行った。活動報告展示では、実際に制作した作品を並べ、その補足として活動内容をまとめたポスターを掲示した。ここで並べた作品は、アート活動が行えるワークショップにて、見本として活用できるようにした。ここでの来場者は135名であった。

3-2 学外との連携

他方、5月には、特定非営利活動法人浜松NP0ネットワークセンターとの協働企画を行った。ここでは、「だべりば」と題した、ゆっくりできる場所とは何かを考えるワークショップを行った。会場は鴨江アートセンターであった。主な内容は話し合いで、「居心地が良い」場所の条件として、何があれば良いか、何がなければ良いかを参加者間で共有した。また、浜松がこんな街だったらという仮想マップづくりも行った。

8月には浜松市市民協働センターにて開催された「ゆるつなフォーラム」への出展も行った。

今年度の学校以外の学びの場・居場所についてのリサーチは、「そよそよのいえ」が中心となった。「そよそよのいえ」は、毎週水・木の2日開いている。集まっている子どもは、7歳～14歳程度であり、平均して7人程度であった。時間割ややらなくてはいけないこと、決められた持ち物が無い。そのため、好きな時間に、持っていきたいものを持ち込み、自由に過ごしていた。一度学校に登校してから遊びに来る者、朝から来て一日中ゲームをしている者と過ごし方は様々であった。「そよそよのいえ」に来る保護者が時間を相談しながら交代で見守っていた。見守りの保護者の人達の子供達との関わり方は人によって様々だった。子どもを誘って自ら行動する者、児童のそばにおり自分から働きかけずに見守る者、子どものやりたいことに対して最大限対応する者などがいた。また、この定期的なボランティアを契機に、「平日昼間の子どもの居場所」に子どもを通わせる保護者へのインタビューを行うことができた。保護者は主に①子どもが学校に行きたくないなどの反応があつてから初めて多様な学びや学校以外の支援の場所を調べて辿り着いた人と、②子どもが未就学児の時期から公立学校以外の「森のようちえん」などの子どもの育ちや学びの場に関心を持っていて、子どももそれを受け入れる素地を持っていたというタイプの2種類に分けられることがわかった。居場所に来るまでの経緯や現在の家庭の状況は様々であったが、大人も子どももそれぞれの個性や特徴、やりたいことを尊重し、個々を受容し共存しようとする暖かい雰囲気を見出ししている点が共通していた。本団体が行なっている定例会は月に1回で、「そよそよのいえ」は週に2回であり活動期間が違うが、来た子どもが自由に過ごせるといった点は同じであった。限られた空間の中で子ども達が自由に居る場所であるために、様々な創意工夫をしている様子がみられた。

4 研究の成果

(1) 当初の計画

浜松の複数大学の学生の多様な専門性に立った視点で、一般市民の方々との下記A～Cの共同的な活動を通して、実践活動及び検証を行う計画であった。

- A. 6月から11月の間に、大学内に不登校児童生徒及び保護者が訪れることのできる時間を提供し、フリースクールや適応指導教室に向かう前段階の居場所として、ものづくりを楽しむことや、情報収集、相談ができるようにする。
- B. 大学の夏季休業に外部の事例を検討するためにフリースクールを訪れ、インタビューを行う。
- C. 浜松学院大学学園祭にて、保護者・関係者の交流会を実施し情報提供を行う。

(2) 実際の内容

Aは、予定通り実施した。Bは、夏以降、浜松市浜名区の「そよそよのいえ」に定期的に訪問したことで関係作りが行われたため、保護者のインタビューにこぎつけた。Cは、浜松学院大学学園祭だけでなく、鴨江アートセンターにて浜松NPOネットワークセンターとの協働企画の開催、浜松市市民協働センターにて「ゆるつなフォーラム」への出展を行った。

(3) 実績・成果と課題

主な活動実績については、複数大学の学生が関わることによって保育・教育と芸術・文化の領域を跨いだ学際的な活動を行うことができた。また、参加者にフリースクール等学校以外の場を知ってもらうきっかけを提供できた。「ゆるつな」との連携によって、ゆるつなフォーラムで配布された情報誌をもとに本研究の定例会に訪れていた親子が、ここで得た情報により、さらにフリースクールや子どもの居場所に訪問する、情報と人の動きのハブのような機能を果たす事例も見られた。

また、本研究では令和5年度に浜松市内の三か所のフリースクールでのインタビュー調査を、令和6年度には磐田市内の校外教育支援センターでの視察を行なった。今年度は、浜松

市北部にある不登校の子どもを中心に支援を行っている平日昼間の子どもの居場所「そよそよのいえ」に定期的に通った。子どもを通わせる保護者へのインタビューを行い、その機能について調査することができた。

(4) 今後の改善点や対策

参加者の中からは、不登校の子ども年齢によっては参加しにくいのではないかという意見もあった。例えば、ワンダーワンダーの参加者は実際に小学生がほとんどであった。中学生以降の子供達で不登校になる子どもも多くいるが、そんな彼等、特に男子は来づらいのではないかと話していた。思春期を迎え、ただでさえ人間関係に悩みを抱え始める中学生にはハードルが高いとの意見もあった。このような意見は既にワンダーワンダーのスタッフ内でも出ており、それも踏まえた居場所作りをしていきたいと考える。また、関わる学生の数については、実際に各イベントに参加できる学生の数はもう少し必要であると考えられた。募集について今後検討を重ねていく。

5 課題提出者・地域への提言

不登校支援については、学校に行けない子ども達に対する世間の意識が当事者の子ども達や保護者の気持ちを無意識に追い詰めてしまっているということがわかった。支援の内容を検討することも大切だが、地域住民に不登校の現状と課題を知ってもらうことによって不登校に対する情報を更新し、地域社会の意識を変革することも重要であると感じる。令和時代の不登校の現状と課題について地域に伝えていく事が非常に重要であると感じている。

6 課題提出者・地域からの評価

実際にワンダーワンダーに参加して頂いた参加者から、下記のような感想を頂いた。

「子どもが不登校になった時、前向きに捉えることができず不安で、しかしカウンセリングや保護者の集まり等はハードルが高かったが、ワンダーワンダーは特に何もしなくても居てもいいというので、居心地が良くプレッシャーがない居場所だと感じた。他の参加者の話を聞いてなるほどと思う事もあった。このような場所が、不登校の子ども達の居場所になれば良いと思った（不登校の保護者 A さんより）」